

世界広宣流布の潮流は、もはや誰人も止めることはできません。

二〇一三年(平成二十五年)に「広宣流布大誓堂」が完成し、世界広布新時代が本格的に始まりました。この間、各国、各地域で、妙法流布の誓願に生きゆく地涌の勇士たちは、青年を先頭に、見事に広布拡大を成し遂げてきました。皆さんのおかげで、万代にわたる基盤を、より堅固に築き上げることができたのです。

いよいよ、「時のしからしむる」(御書三二九頁)との御聖訓のままに、滔々たる大河の如く水かさを増し、潤す流域を広げながら、世界広布をさらに前進させゆく時を迎えました。

人間の善性の薫発と連帯

創価学会は、生命尊厳の哲理たる日蓮大聖人の仏法を世界に広める広宣流布の団体です。

人間の善性を薫発して、民衆の境涯を高め、幸福と平和の連帯を拡大していくことが広宣流布の目的です。

あらためて言えば、わが学会は、人類救済と恒久平和を実現する崇高な使命を帯びて、一九三〇年(昭和五年)、二つの世界大戦に挟まれた時に出現しました。

そして、一九七五年(昭和五十年)、東西冷戦のさなか、核戦争の危機さえ帯びた時代にSGI(創価学会インタナショナル)が発足しました。

「創価学会は、すでに世界的出来事」

トインビー博士[注1]は、一九七二年(昭和四十七年)に出版された英文『人間革命』第一巻に序文を寄せてくださり、「創価学会は、すでに世界的出来事である」「日蓮の地平(視野)と関心は、日本の海岸線に限定されるものではない。日蓮は、自分の思い描く仏教は、すべての場所の人間仲間を救済する手段であると考えた。創価学会は、人間革命の活動を通し、その日蓮の

遺命を実行しているのである」と述べられました。

まさに今、地球規模で広がる創価の人間革命の運動を、いやまして人々が注目し、期待する時代に入っています。

私たちは、この時を逃さず、一人一人が幸福の花を咲かせつつ、世界平和の実現へ、人類の宿命転換へ、一歩また一歩と、「人間対人間」の対話を力強く進めてまいりたい。

「乱れた世の中を変えていくのだ」

恩師・戸田城聖先生は語られました。

「今の乱れた世の中を、創価学会が変えていくのだ。勇気を奮い起こし、一致団結して、広宣流布の大道を進もうではないか！」と。

未聞の大偉業に、障魔が競い起こるのは必然です。だからこそ、仏の陣列である私たちは、信心根本に、どこまでも「団結」していくのです。いかなる三障四魔や三類の強敵【注2】にも絶対に破れない「広布の城」「民衆の城」「平和の城」を創り上げていく責務があるのです。

仏道を正しく実践し、法を広めゆく人々の集いを、「和合僧」と呼びます。

仏教では、民主的な共同体であるサンガ【注3】という和合僧があつてこそ、各人の仏道修行が成就することが説かれています。今日で言えば「組織」です。私たちが信仰を實踐し、一生成仏を實現し、広宣流布を目指すためには組織が不可欠です。創価学会こそが、現代における世界広布の和合僧にほかなりません。

ここでは、「広宣流布の組織」の重要性について、御書を拝して確認していきましよう。

御文
(御書一四六八六一行目〜七行目)

夫れ木をうえ候には大風吹き候へどもつよきすけをかひぬれ
ば・たうれず、本より生いて候木なれども根の弱きは・たうれぬ、
甲斐無き者なれども・たすくる者強ければたうれず、すこし健の者
も独なれば悪しきみちには・たうれぬ(中略)仏になるみちは善知
識にはすぎず、わが智慧なにかせん、ただあつきつめたきばかり
の智慧だにも候ならば善知識たいせちなり

現代語訳

そもそも、木を植える場合、大風が吹いたとしても、強い支えが
あれば倒れない。もともと生えていた木であっても、根の弱いもの
は倒れてしまう。弱く不甲斐ない者であっても、助ける者が強けれ
ば倒れない。少し壮健な者でも、独りであれば悪い道では倒れてし
まう。(中略)

仏になる道は善知識に勝るものはない。わが智慧は何の役に立
とう。ただ暑さ寒さを知るだけの智慧でもあるならば、善知識が大
切なのである。

仏典に記された釈尊と阿難の対話

「三三藏祈雨事」[〔注4〕](#)の一節では、「善知識」[〔注5〕](#)という強い支えがあれば、必ず苦難や試練を乗り越えられると教えられています。

釈尊と弟子の阿難[〔注6〕](#)との対話のエピソードがあります。

——ある時、阿難は釈尊に尋ねました。

「私どもが善き友を持ち、善き友と一緒に進むことは、すでに仏道の半ばを成就したに等しいと思われます。この考え方は、正しいでしょうか」

それに対して、釈尊は明確に答えました。

「阿難よ、その考え方は、正しくない。善き友を持ち、善き友と一緒に進むということは、仏道の半ばではなく、仏道の全てなのである」と——。

ここに、仏道修行の本来の在り方が、端的に示されています。最後まで正しき信心を全うし、真実の勝利の人生を歩み抜くためには、自分を支えてくれる「善き友」、すなわち「善知識」の存在が絶対に必要なのです。

正しい仏法に導く師匠・善友

もともと仏法用語の「知識」とは、サンスクリット(古代インドの言語)の「ミトラ(友人)」を漢訳した言葉です。

ですから、「善知識」とは、正しい仏法に導いてくれる人、すなわち「善き師匠」であり「善き同志」「善友」のことを指します。

大聖人は、「わが智慧なにかせん」と述べられ、善知識を求めていくことが、何にもまして大切になることを強調されています。

なぜなら、仏になる道以外に、「生死」という人生の根源的な悩みを乗り越える方途はありません。自身を支え、励ましてくれる善知識に縁すること

で、私たちは信心を鍛え、幸福への智慧を出し、絶対的な仏の境涯を開いていくことができるからです。

仏道修行に励もうとする心を破る

しかし、善知識は「爪の上の土」よりも少なく、出会うことは極めて難しい【注7】。一方で、信心の実践を妨げる存在として「悪知識」があります。その特徴を大聖人は、「甘い言葉で語り掛け、偽り、媚び、言葉巧みに、愚癡の人たちの心を取って、仏道修行に励もうとする心を破る」(御書七ページ、通解)と喝破されています【注8】。

牧口先生が御書に線を引かれ、弟子たちに深き用心を促されていた御聖訓です。

悪知識は、実に紛らわしい姿で、私たちの心を揺さぶり、求道の善心を破壊しようと迫ってきます。しかも、悪世末法はなおさら善知識が少なく、悪知識が充満しているのです。

したがって、善知識にめぐりあうこと、善知識の世界に縁することが、どれだけ貴重であり、幸運なことか、計り知れません。

創価学会は「民衆の安全地帯」

大聖人は「悪知識を捨てて善友に親近せよ」(御書一二四四ページ)と厳命されました。ゆえに、悪知識を見破り、障魔をはね返す「正義の砦」が大切なのです。

創価学会は、牧口先生、戸田先生の不惜身命【注9】の闘争から始まった大聖人直結の団体です。御本仏の一切衆生救済の精神が横溢している、「民衆の安全地帯」です。善友が集い合い、誰も置き去りにしない「温かな人間主義の組織」です。

地位や名譽、財産も関係なく、老若男女を問わず、互いに飾らず、ありのままの人間として共に励まし合い、共に成長し、幸福を勝ち取る「庶民の城」でもあります。

戸田先生は、「創価学会の組織は、戸田の命よりも大事である！」と宣言されました。仏勅（仏の命令）の使命を帯びた未曾有の世界広宣流布の団体を、断じて大切にせよとの師子吼です。

「学会員を大切に励ましていくのだ」

戸田先生は、リーダーによく語られました。

「会員を大切に頼むよ！ 頼むよ！

学会員は大聖人の子どもである。大聖人の仏法を流布している仏さまである。ゆえに、大切に励まし、守り抜いていくのだ」と。

新会員の宝友を大切に育成していくために、私たちが先輩として心掛けた点があります。それは、「共に」という一点です。

「共に」という心と行動のなかに、日蓮仏法の真髓があります。師弟の本

質も「共戦」にあるのです。御書には「喜とは自他共に喜ぶ事なり（中略）自他共に智慧と慈悲と有るを喜とは云うなり」（七六一ページ）と仰せです。

自分一人だけの喜びにとどまりません。自他共に喜び、智慧と慈悲を發揮することが、最高の喜びになるのです。

今、多くの新会員が決意も新たに折伏・弘教に奮闘しています。青年部の共進、共戦も頼もしい限りです。

新たに立ち上がった友も多い。その陰には、共に広布の大道を進んでいきたいと、共に励まし、共に祈り、共に学び、共に動き続けてくれた幾多の先輩や同志の奮闘があります。

先輩たちにとっても、そうした経験は、自身の境涯を開ききっかけとなっています。また、成長した人材が、今度は後輩と一緒に前進する中で「心

の財たから」(御書一一七三三)を積み上げていきます。こうした希望きぼうの連動れんどうの中でこそ、私たちは悩みなやを乗り越えて、自他共に大歡喜だいかんきの人間革命じんかんかくめいを成し遂げとていくことができるのです。

異体同心いたいどうしん事

御文

(御書一四六三三―二行目、六行目)

異体同心いたいどうしんなれば万事ばんじを成じようじ同体異心どうたいいしんなれば諸事叶しよじかなう事ことなしと申もうす事は外典げてん三千余卷さんぜんよかんに定さだまりて候そうろう、殷いんの紂王ちゆうおうは七十万騎ななじゆうまんきなれども同体異心どうたいいしんなればいくさにまけぬ、周しゆうの武王ぶおうは八百人はっぴやくにんなれども異体同心いたいどうしんなれば勝かちぬ(中略)日蓮にちれんが一類いちるいは異体同心いたいどうしんなれば人人ひとびとすくなそうらく候そうらへども大事だいじを成じようじて・一定法華經いちじようほけきようひろまりなんと覺おほへ候そうろう、悪あくは多おほけれども一善いちぜんにかつ事ことなし

現代語訳

異体同心いたいどうしんであれば万事ばんじを成なし遂とげることができであろうが、同体異心たいいしんであれば諸事万般しよじばんばんにわたって叶かなうことはないであろう。

このことは、外典げてんの三千余卷さんぜんよかんの書物しよもつにも定さだまっていることである。殷いんの紂王ちゆうおうは、七十万騎まんきであったが同体異心どうたいいしんであったので、戦たたかいに負まけてしまった。周しゆうの武王ぶおうは、わずか八百人はっぴやくにんであったけれど、異体同心いたいどうしんであったので、勝かつたのである。(中略)

日蓮の門下もんかは異体同心いたいどうしんであるので、人々は少ないけれども、大事だいじ

を成し遂げて、必ず法華経が広まるであろうと考えるのである。
悪は多けれども一善に勝つことはない。

永遠にわたる「勝利の方程式」

続いて拝するのは、広布推進の要諦である「異体同心の団結」について述べられた「異体同心事」〔注10〕の御文です。ここには、後世永遠に弟子一同が拝すべき勝利の方程式が厳然と記されています。

大聖人が身延に入られた文永十一年（一二七四年）五月以後、駿河（静岡県中央部）では、日興上人を中心に弘教が進み、他宗の僧や在家の人々が次々と皈依しました。

こうした動きに、熱原郷の滝泉寺の院主代（住職代理）であつた行智が危機感を募らせました。権勢を利用し、謀略を巡らせて、大聖人門下への弾圧を企てるのです。

本抄では、権力と聖職者が結託した迫害のなか、門下が大難を乗り越えていく要諦として「異体同心」の団結が強調されています。

一人の特質や個性を最大に尊重

冒頭で、「異体同心なれば万事を成じ同体異心なれば諸事叶う事なし」と、異体同心を成し遂げる信心の大切さを示されています。

「異体」とは、一人一人の姿形、性格、才能、特質などが、さまざまに異なることであり、「同心」とは、志や心、目的観を同じくすることを指します。

したがって、「異体同心」とは、一人一人の特質や個性を最大に尊重しつつ、共通の目的のもとに心を合わせて団結し、行動していく姿です。反対に「同体異心」とは、外見上は一つの姿でも、心は全くまとまっていない状態をいいます。

その具体的な例として、古代中国における「殷の紂王」と「周の武王」の戦いが挙げられています【注11】。

ここで象徴的なことは、殷の兵士たちも、心中では紂王が倒れることを望んでいたということです。『史記』【注12】には、彼らが武器を逆さまに持ち、周の軍勢に道を開けたと伝えられています。

悪勢力は、互いの利害で野合することはあっても、結局は離反します。真に「同心」たらしめるか否かは、民衆の幸福を願う「志ざし」があるかないかです。目的観の深さが、揺るがぬ異体同心の団結を築くのです。

広布を目指す「正義の連帯」

いかに強大な権力をもって迫害を加えようとも、広布を目指す正義の連帯である「一善」を破壊することはできません。強き信心の団結を貫き通せば、いかなる障魔をも打ち破り、絶対に勝利していただけるのです。

では、異体同心の団結を築くためには、どうすればいいのか――。

私は、広宣流布の師匠である戸田先生のもとで、「師と共に」との一念を定めて祈り、戦い拔きました。

「誰か」ではなく「自ら」が立ち上がり、広布拡大の先陣を切り開いていく。そして、どこまでも同志と力を合わせ、互いに励まし合いながら進むのです。

「異体同心」の「心」とは「広宣流布を願う心」です。また、同志である「学会員を尊敬する心」です。さらには、いかなる圧迫も恐れない「師子王の心」です。そして、この究極が「師弟不二の心」なのです。

「自他彼此の心なく」前進

大聖人は「生死一大事血脈抄」の中で、「総じて日蓮が弟子檀那等・自他彼此の心なく水魚の思を成して異体同心にして南無妙法蓮華經と唱え奉る処を生死一大事の血脈とは云うなり、然も今日蓮が弘通する処の所詮是なり、若し然らば広宣流布の大願も叶うべき者か」(御書一三三七頁)とも仰せです。

「生死一大事の血脈」とは、生命の根源の法(南無妙法蓮華經)が、仏から人々の生命に伝えられることです。異体同心で南無妙法蓮華經と唱えてこそ、一生成仏も、広布の大願も実現するとの仰せです。

それは、「自他彼此の心なく」とあるように、互いに対立し、排斥しあうのではなく、また、「水魚の思を成して」とあるように、互いをかけがえない存在、自分にとって不可欠な存在として大切に思うことです。どこまでも広宣流布のために、心を一つに題目を唱え、互いに助け合っていくことこそ、「異体同心」なのです。

個人も個性も輝きを増していく

団結が強調されると、ともすれば、「個人」や「個性」は押しつぶされて埋没してしまうかと思うかもしれません。しかし、大聖人が教える「異体同心」は全く違います。

仏法は万人に仏性があると説き、どこまでも一人一人の可能性を信じ、その開花を促します。「桜梅桃李」です。一人一人の個性を重視し、互いに磨き合い、生かしあつていく不断の努力があつてこそ、大聖人の示された「異体同心」が実現していくのです。

反対に言えば、各人が麗しい「異体同心」の集いの中でこそ、個人も個性も輝きを増すといえます。「同心」を目指しての信仰の錬磨があつてこそ、「異体」の価値がいやまして光るのです。

現実に学会では、自身の使命を自覚した多彩な宝友が、同志との励まし合いを力として、自分らしく生き生きと個性を発揮して社会のあらゆる分野で乱舞しています。戸田先生は「異体同心ならば叶わないことはない。その逆ならば、何であつても崩れてしまう」と繰り返し語られていました。

識者「青年や女性の力が発揮」

欧州で活躍されている宗教学者のミヒヤエル・フォン・ブリュック博士〔注13〕は、創価学会の社会的役割に期待し、聖教新聞にも声を寄せられています。

「学会では、青年や女性の力を引き出すために、さまざまな運動を推進してきていますが、その運動の中心的な立場を担っているのはメンバー一人一人です」

「学会の運動は、あらゆる人々が積極的に参加し、社会的な力を発揮できるものです。だからこそ、学会は批判もされてきました。しかし、そうした運動がなければ、社会を変えることはできません」

欧州をはじめ、世界のいずこにあつても、創価学会は民族や文化・習慣、そして言語の壁を越えて、異体同心の躍動があります。とりわけ座談会には、

一人一人の個性が輝きながら、美しい友情と信頼の花が咲き薫っています。ブリュック博士ご自身も、学会の座談会に参加して共感され、そのなかでも女性の活躍を賞讃されていました。

今後さらに、創価学会の異体同心の哲学が、人類の調和と和合の原理として、普遍的な価値を創造していくことは間違いありません。

創価学会という善知識の中で、共に切磋琢磨し、成長していく世界市民の輩出にこそ、地球社会の確かな未来と平和があるのです。

どこまでも創価の中で共に進もう

広布の誓願に向かって異体同心で進む学会だからこそ、一人一人が人間革命できるのです。そして、人々が希求してやまなかった恒久平和への連帯を創り広げながら、やがては国土、そして全人類の宿命の転換をも可能にしていけるのです。創価学会には「希望創出」の使命があるのです。

さあ、各人が広布の山の登攀を目指して、共に進み、共に勝利の歴史を築いてまいりましょう！

「注 解」

〔注1〕「トインビー博士」アーノルド・J・トインビー。一八八九年～一九七五年。イギリスの歴史学者・文明史家。ロンドン大学、王立国際問題研究所の要職を歴任。代表作『歴史の研究』は各界に大きな影響を与えた。池田先生との対談『二十一世紀への対話』（『池田大作全集』3巻）は、人類に貴重な展望を与えるものとして、今も大きな反響を広げている。

〔注2〕「三類の強敵」釈尊滅後の悪世で法華経を弘通する人を迫害する三種類の強敵。①俗衆増上慢（在家の迫害者）②道門増上慢（出家の迫害者）③僭聖増上慢（迫害の元凶となる高僧）。

〔注3〕「サンガ」仏道を正しく実践し広めている人々の集い。サンスクリットではサンガと呼ばれ、漢訳經典では「僧伽」などと音写され、「和合」などと訳される。その両者を併せて「和合僧」ともいう。この「僧」とは、音写であつて、出家僧に限定されない。本来、サンガとは、「集団」「集会」「会議」など民主的な集団を表現する言葉だが、仏教徒の僧俗男女の集いとして用いられるようになった。

〔注4〕「三三藏祈雨事」建治元年（一二七五年）、または、その翌年に身延で著され、駿河国（静岡県 中央部）富士上方西山郷に住む門下・西山入道に与えられたお手紙とされる。善知識の重要性や現証の重要性が説かれていることで知られている。

〔注5〕「善知識」よい友人・知人の意。仏法を教え仏道に導いてくれる人。師匠や、仏道修行を励ましてくれる先輩・同志をいう。これに対して、誤った教えを説いて人々を迷わせ、仏道修行を妨げたり不幸に陥れる悪僧・悪人を「悪知識」という。

〔注6〕「阿難」釈尊の声聞の十大弟子の一人。釈尊の侍者として、多くの説法を聞き、多聞第一とされる。

〔注7〕「三蔵祈雨事」では、「されば仏は善知識に値う事をば一眼のかめの浮木に入り・梵天よりいとを下て大地のはりのめに入るにたとへ給へり、而るに末代悪世には悪知識は大地微塵よりもをほく善知識は爪上の土よりもすくなし」(御書二四六八ページ)と示されている。

〔注8〕「唱法華題目抄」に、「悪知識と申すは甘くかたらひ詐り媚び言を巧にして愚癡の人の心を取って善心を破るといふ事なり」(御書七ページ)と仰せである。

〔注9〕「不惜身命」「身命を惜しまざるべし」と読み下す。法華経勸持品第十三の文(法華経四一二ページ)。仏法求道のため、また法華経弘通のために身命を惜しまないこと。

〔注10〕「異体同心事」御述作の年月や送られた人は不明。本抄前半では、駿河の地で活躍している日興上人の名前や、「あつわらの者どもの御心ざし」(御書一四六三ページ)との仰せがあることから、駿河に住む門下に与えられたと推察される。内容から、権力からの迫害に対する御指導と考えられる。

〔注11〕「殷の紂王 周の武王」古代中国で黄河流域を支配していた殷(商)は、紀元前十二〜十一世紀頃、紂王の暴政によって民意を失っていた。これに周の文王は対立し、その子・武王は紂王を攻めて殷を滅ぼし、周は長く栄えた。

〔注12〕「史記」中国・前漢の太史公・司馬遷(紀元前一四五年頃〜前八六年頃)が著した歴史書。中国初の通史で、後の正史の手本とされた。古くは伝説上の帝王である黄帝から、近くは司馬遷の同時代である漢の武帝期までの歴史が編纂されている。

〔注13〕「ミヒヤエル・フォン・ブリュック博士」一九四九年〜。ドイツのレーゲンスブルク大学教授(比較宗教学)、ミュンヘン大学教授(宗教学)などを経て、私立リンツ・キリスト教大学名誉教授。専門はヒンズー教、仏教、宗教間対話の解釈学。